全国大会優良賞
島根県

私の今からのシアワセ

益田東高等学校　２学年　大羽健太郎

ラジオを聴きながら静かに本を読んでいる、そんな母の姿が大好きです。母が沈んでいる時は、武田鉄矢の「このバカチンが」とか、井上陽水の「お元気ですか」などとモノマネをして、笑顔の母を見ることが、私の今のシアワセです。

みなさんは、街中などで障害がある人を見かけた時、ガイジだとか、キモイとか、かわいそうと思う人はいませんか。おぼつかないしぐさを不思議そうに眺めたり、一生懸命に生きている人を馬鹿にしている人はいませんか。ガイジやキモイなどと、何気なく放った言葉が、他人をどれだけ傷つけるか、想像したことがありますか。かわいそうという言葉を、まるで相手に聞こえるように言う人を見かけることがありますが、私にはとても言うことはできません。なぜなら、かわいそうと思うことなど何もないからです。周りにいる人たちと同じように笑い、泣きながら精一杯生きている人をかわいそうと思うどころか、心や体にハンデがありながらも、みんなと同じように生きている姿は、むしろとても立派ですごいと思うのです。

私の母は、私が二歳の頃から精神病を患っています。統合失調症という、精神の病に冒され、感情が乏しくなって無表情になり、外に出ず家にこもりがちです。ひどい時には、幻聴や幻覚症状が現れて被害妄想にもなります。自らの首を絞めて、「死なせてくれ。」と叫んでいる母が、現実として目の前にいるのです。私たちには見えない、聞こえないはずの現象が、母には嘘ではなく見えて聞こえているのです。そんな中で、母はもがき、一人で苦しみ闘っているのです。いちばん驚いたのは、母が包丁を持ち、天井にいるというおじさんに向かって、「おじさんの首を切っている。苦しいか。」と叫んでいたのです。普通では考えられない母親の姿ですが、これが私の、そして母の日常で起きている現実なのです。

毎日、学校から帰ると、まず母のことが気がかりです。最近は、母に喜怒哀楽がなくなってきました。笑顔の母は見ることが少なくなりました。この幻聴・幻覚は毎日のように続きます。そんな母のことが理解できなくて、何度も母に腹を立てたこともありました。「何なん、この病気。」と、母から目を背けたこともありました。しかし、私は今までただの一度も「こんな母のところに生まれたくなかった。」と思ったことはありません。一人で病気に苦しむ母の姿が、どれだけ切ないことか。父と妹と私に助けを求めてくる母を、どうして放っておくことができるでしょうか。私にとって、たった一人のかけがえのない母なのです。この母の姿に、キモイとか、かわいそうと思う人がいるなら、母をバカにされているような気がしますし、一生懸命に生きている一人の人間に対して失礼ではありませんか。

そんな母に、私が教えてもらったこと。それは共に生きる、みんなと平等に生きるということです。私は父と母のお陰で生きていて、みんなの支えがあって、今日まで生きてこられました。母の精神状態は、ますます悪くなっていますが、それでも家事をしてくれ、私に大好きな野球をさせてくれます。当たり前のように学校に通わせてもらっていて、心から感謝しています。

世の中には、生まれながらにして障害がある人や、不自由な体になって大変な生活を送ったりしている人がたくさんいると思います。病気や障害の有る無しにかかわらず、すべての人たちが助け合い、支え合って生活できる世の中を、誰もが望んでいいはずです。また、そうすることこそが差別や偏見をなくし、みんなが平等に生活できるのだと、私はそう信じています。病気や障害がある人たちに対して投げかける言葉が、キモイという心ないものや、同情や哀れみからくるかわいそうではなく、一人の対等な人間として、「何か手伝いましょうか。」という、優しい心遣いの言葉に変わって欲しいのです。

この弁論を機に、月に二回程度、福祉施設や各種団体の会合で、スピーチと一緒にものまねをしたり歌を歌ったりしながら、皆さんの笑顔を求めてボランティアをしています。将来の夢は、消防士になることです。こんな私でも、何か人のお役に立つことで皆さんの笑顔が広がっていくこと。それが私の今からのシアワセです。